

十三、校友会等に於ける厚生事業

1、担当機構 校友会厚生部

2、事業 内職幹旋、学用品販売、生徒食堂経営

十四、学生団体 無

十五、其他

### ⑧ 戦後第一回生徒募集・男女共学

男女共学の実施

敗戦後、GHQが出した「五大改革指令」は戦前の極端な男女差別を撤廃して男女同権を実現することを筆頭に掲げていた。それに基づいて、政府は昭和二十年十二月四日に「女子教育刷新要綱」を発表。その結果、高等教育における男女共学が実施されることになり、また、同二十二年三月三十一日公布の教育基本法によって男女の教育における機会均等が保証されることになった。本校は、戦前において幾度も男女共学の実施を要請したにも拘らず（年報記事参照）遂に認可されなかったが、ここに至って漸くその実現をみるこ  
とになったのである。

昭和二十一年春の生徒募集には多数の女子が応募した。その正確な数は不明だが、『上野直昭日記』には志願者六九八名中女子百名以上とある。同じ日記に、直昭は四月十六日に試験場を巡回して「女子比較的強しと覚ゆ。随分まづい男も来てゐる。」などとも記している。四月二十三日に合格発表が行われ、初めて三十七名の女子（うち二名は中国人特別学生）が男子と全く同じ条件で予科入学を許可されたのである。各科の配分は左記の通りであった。

新入学生（予科生、特別学生、選科生合計）

科	男子		女子	
	人数	部	人数	部
油画科	三二		一七	
日本画科	一四		八	
師範科	一五		六	
彫刻科	一九		三	
工芸科	二一	図案部	一	
	六	彫金部	一	
	一五	漆工部	一	
	四	鍍金部	〇	
	二	鍛金部	〇	
建築科	二〇		〇	

第一期女生徒のなかには特別上流階級（政府の高官、財閥）もあ

戦後第1回入学生  
(平出敏子氏提供)

れば美術家の家庭出身者もあり、受験勉強をした人もあれば、ただ単に絵が好きというだけで、当面何もすることがなかったから受験したという人もいた。ある人は業専の願書を貰いに行つて、間違えて手前の本校で願書を貰い、それもよいと思つて受験して入つてしまったという。したがつて、確たる信念もなく志望する科を届け出た人も少なくない。尤も、なかには本校に入りたくて、まだ男子校だったときから幾度も願書を貰いに来て断られた人もいた。女子美や多摩美女子部の在校生や卒業生も受験した。女子美からは十数名が受験し、一部が合格している。終戦直後のこととて、男女を問わず新入生の境遇はまちまちで、年齢も十歳ほどの開きがあつた。

第一回女生徒出身校

東京	私立	中村女学校卒	一人	女子学院卒	一人
"	"	女子学習院高等科卒	"	聖学院卒	"
"	"	女子聖学院卒	"	共立女子専門学校卒	"
"	"	女子美術学校三年中退	"	香蘭高等女学校卒	"
"	"	大妻高等女学校卒	"	日出高等女学校卒	"
"	"	双葉高等女学校卒	"	駒沢高等女学校卒	"
"	"	女子学習院高等科卒	"	立正学園高等女学校卒	"
"	"	日本女子大学附属高等女学校卒	"	女子美術学校一年中退	"
"	"	多摩帝国美術学校卒	"	家政学院高等女学校卒	"
"	"	成城高等女学校卒	"	洗足高等女学校卒	"
"	"	富士見高等女学校卒	"	第二高等女学校卒	"
"	"	佐藤高等女学校卒	二人	女子美術学校一年修了	"
				第六高等女学校卒	"
				第八高等女学校卒	"
				第十高等女学校卒	"
				目黒高等女学校卒	"
				桜町高等女学校卒	"
				旭川市立高等女学校卒	"
				県立第二神戸高等女学校卒	"
				私立神戸頌栄保育専攻学校卒	"
				県立国府台学院高等女学校卒	"
				県立野田高等女学校卒	"
				私立女子美術学校一年中退	"
				佐原高等女学校卒	"

埼玉	県立浦和第一高等学校卒	〃
東京	私立女子美術学校一年中退	〃
神奈川	私立横浜捜真女学校卒	〃
長野	県立長野高等女学校卒	〃
上海	広東中小学校卒	〃

新入生と戦後教育の開始

この年の入試科目は次のとおりであった。

実技

日本画科	石膏仏像の首写生	十二時間	木炭、鉛筆使用自由
油画科	石膏胸像	八時間	同 右
彫刻科	同 右	同 右	同 右
工芸科	鉛筆淡彩 椿と熊笹	六時間	同 右

感覚考查(一)

三時間

「一辺ノ長サ約二十種ノ正方形ヲ書キコレヲ直線ニヨ



日本画科生徒の山中湖旅行(同前)  
引率村田泥牛(傘を持つ人)

ツテ自由ニ二十一区ニ区分セヨ 次ニ彩色ヲホドコセ  
但シ色数ハ限定セズ」

同 (二)

建築科 石膏像写生

学科

建築科 数学

作文

各科共通 題「我が好む花」毛筆で書く

〔昭和七年以降、昭和二十二年迄、各科入学試験問題綴教務科による。師範科については記録が欠落している。〕

この外に一年以内に描いた自作(着彩)の提出と口頭試問、身体検査が課せられた。

合格者は例年になく多かった。そして、今回は戦争で教育が破壊された時代を経て初めての生徒募集だったので、生徒の年齢も境遇もまちまちであった。この点について島田文雄氏(二十一年漆工部入学)は

廿一年度の募集は、男女共学になり、初めての女子入学となった。又、特筆すべき点は、戦中を通して、美術に憧れつゝも志を変えて他の分野に、或いは軍隊に行った人々が、終戦により自己の意志の自由を得て、年齢を越えて入学した事だった。従って、男子の最年長者は、大陸北支から南支迄、騎兵隊の大尉として従軍した中尾喜保氏(二十九才)で、外にB29の撃墜に戦功のあった柳沢淑郎氏(二十五才)あり、海兵、商船学校、一高等から

等々、多種多様の人々の集合であった。女子の最高は女子美から来た某氏（二十七才）だったと思う。

と記している（島田氏には在校中の思い出を執筆して頂いた）。

多数を採用したのは受験生の実力に大きな格差があったためと考えられる。油画科に入ったA氏の場合は、幼い頃から絵は上手だったのだが、中学時代は戦争の真っ只中で勤労動員に駆り出されたため、木炭デッサンの経験など全くない。入試科目に石膏デッサンがあると聞いて、田舎の中学の美術室にあった唯一の石膏像チルミチルを鉛筆で拡大デッサンしてみただけで試験に臨んだ。そこで他の受験生がやっているのを見て初めて木炭デッサンというものを知り（中には木炭デッサンと聞いて火鉢にくべる炭をリュックに詰めて上京したという人もいる）、パンで消しているのを見てびっくりしたという。油絵も描いたことのない彼が持参したのは勿論水彩画であった。最も競争率が高く、大抵の生徒が研究所などでデッサンの腕を鍛えて受験した油画科でさえ、今回はA氏のような生徒も多数受験したため、かつてのような合格判定の技術水準が適用できず、とりあえず多数を採用して予科（一年間）で様子を見て、本科に入れる際に厳しい判定をしようというのが学校当局の考えだったようだ。

予科（この年に復活）では受験番号順にA B C Dの四クラスに分け、基礎としての学科と実技の教育を行なった。実技は四クラスが交代で各分野の基礎実技（日本画、デッサン、彫刻、デザイン）を習うのだった。それは各分野の基礎実技の習得が芸術教育上必要だ

とする教育理念によるというのではなく、当時生徒だった人々の証言によれば、学校当局は「適性を見るため」の措置であると説明したという。知識、経験に乏しい生徒たちに一年間、試験的に各種の実技を経験させて、受験の際届け出た志望の科に本当に自分が向いているかどうかを決めさせようというのであった。つまり、生徒には予科の最後に転科の機会が与えられたのであるが、この方法をとった結果、油画科希望者が多くなってしまったので（上野直昭日記には油画科への転科希望者十五名とある）、これは取り止めになり、次年度から予科生の実技は石膏デッサンのみとなった。

予科一年間の最後に試験ないし成績判定があり、そこで不合格となると留年は認められず、即刻退学することになっていった。二十一年度入学の生徒は性別を問わず多数が除名されている。転科者は割合少なかった。

#### 物資不足と学生生活

当時は極度の食料不足のため、栄養失調の生徒が多く、それがもとで病気になる者もあった。食料が入手できなくなって学校の食堂も閉鎖されてしまうと、空腹のため学校に居られない生徒も出てくるような状態で、家から弁当を持って来たとしても、中身はサツマイモとか配給のトウモロコシ粉をこねて作ったものとかで、伸び盛りの生徒たちの胃袋を満たすに足りるものではなかった。前出の島田氏は次のように記している。

終戦直後の悲惨さは、勉強する状態ではなかったと言う外はな

い。入学して夏休みに入る前の七月の暑い日、美術解剖学の西田正秋先生は、軍隊服に戦斗帽で雑糞を肩に掛け軍靴姿。そして、大講堂での講義では「腹が空<sup>く</sup>っては、授業も出来ぬ」と絶叫した事が今だに眼に焼きついている。当時の生徒の服装も、皆夫々の立場で軍隊帰りは軍服姿、中学を卒業して現役で入った者はその学校の制服姿といった風だった。

教材の配給も不足しがちであった。学校当局は出来る限り材料を支給し、教官も手持ちのものを与え、校内の画材屋などいろいろなと工面してくれたりしたが、不便が多かった。木炭紙は容易に手に入らないから、裏にも描き、昔の生徒が描いたものを貰って裏に描いたりした。絵の具は発色の悪い安物が多かった。彫刻科では心棒に使う棕櫚繩が入手できず、校庭の棕櫚の皮をむしり取って繩をな<sup>い</sup>、それを使ったりしたという。特に燃料の不足には困<sup>ら</sup>たらしく、学生生活に慣れた上級生たちが、苦心してどこからか燃料を集めて来たり、時には女生徒も一緒に大八車を押して焼け跡へ燃料になるものを貰いに行ったりした。動物園との境になっていた根だの腐<sup>った</sup>塀はみ<sup>な</sup>で引き倒し、古びた小屋はつ<sup>ぶ</sup>して薪にし、教室の羽目板や、あげくの果てには床まで剥がしてコンクリート剥き出しにしてしまったところもある。校内の燃やしてよいものは全部燃やしてしまい、遂には階段の手すりの棧を間引こうとか、装飾の擬宝珠も切り取ろうとかしたという。そして、少しでも余計に暖かくするために、粘土でストーブの口を塞いでみたり、また、モデルだけストーブのそばに寄り、生徒たちは震えながら制作するようなこと

もあ<sup>っ</sup>た。

#### 第一回女生徒たち

男子のみによって歴史が築かれ、女性といえはモデルか僅かの事務職員以外になかった本校に女生徒が入学したことは画期的なことであ<sup>っ</sup>た。パンカラ風が影をひそめ、校風が一変してしま<sup>っ</sup>たと嘆く者もあるが、大きな前進であ<sup>っ</sup>たことに変わりはない。

第一回女生徒たちの話によれば、女子受入れのための準備らしきものは殆ど何もなされておらず、そのため、予科長の西田正秋に頼んで早急に女子控室などの設備を作<sup>っ</sup>て貰<sup>わ</sup>なければならな<sup>か</sup>ったという。女子控室は本館の中央廊下奥左側の角に設けられた。トイレもはじめは男子と共用で、不便を強いられたが、やがて女子の陳情によって女子専用のも<sup>の</sup>が新築された。

教官のなかには、死線をさまよ<sup>っ</sup>てきた復員生徒と戦争中髪を飾<sup>る</sup>こともなく過<sup>ご</sup>した女生徒を一緒にした場合、問題が起<sup>こ</sup>りはしないかと心配する向きもあ<sup>っ</sup>た。そこで学校当局は男女交際には一切関せず、もしも問題を起<sup>こ</sup>したら即刻退学させるとい<sup>う</sup>方針を徹底させた。実際に退学とな<sup>っ</sup>た例もある。

荒れ果<sup>て</sup>た校舎、粗野な校風、物資不足、通学難に加えて、一部には女子排斥の言動もあ<sup>っ</sup>たなかで、女生徒たちは緊張した毎日を送<sup>っ</sup>たが、むしろ女性であることによ<sup>っ</sup>て親切な扱いを受<sup>け</sup>る利点の方が多<sup>か</sup>ったと言<sup>う</sup>人もい<sup>る</sup>。困難な時代ではあ<sup>っ</sup>たが、規律の厳<sup>し</sup>かった女学校と比べると、どうしてよ<sup>い</sup>かわからないほど無規律で自由な校風だ<sup>っ</sup>たので、何よりも先<sup>ず</sup>それに大変衝撃を受<sup>け</sup>た

という人が多い。

女生徒のために一時期男子生徒に做った黒ないし紺サージの制服と襟章が作られたこともあったが、生徒が反対したため普及しなかった。恐らく粗悪品だったのだろう、満員電車から降りたらボタンが一つもなかったという話もある。物資不足の折り、毛布で作った上着やズボン、焼け残りのカーテンで作ったブラウス、敷物マットで作った靴等々、みな有り合わせのものを着て登校した。

男女共学になったとは言え、昭和二十年代の学生生活は困難の多いものだった。そうした困難を乗り越えさせたものは、若さと向学心、新しい時代への期待であったと言えよう。第一回女生徒三十七名のなかには病死した者、病氣や結婚その他により退学した者も多く、順当に卒業したのは二十七名であったが、努力家が多かった。油画科の卒業制作の採点の結果、トップは勿論、上位は全て女生徒が占めたという。

### ⑨ 校友会の復活と芸術講座

昭和十六年、校友会が報国団に組織替えされて以来、課外活動は極めて制限されたものとなり、体練の方面に比べて文化方面の活動は殆んど火が消えたも同然となった。昭和二十年九月、文部省は学報報国団を解体して自治的校友会に再編するよう指示し、そのため本校生たちも翌二十一年五月十日、入学式の後で学生大会を開催し、ここに校友会が復活した。そして、戦争中の文化的空白を埋めようとするかのように七月三日から十一日にかけて講堂で校友会主催の芸術講座（公開）を開いた。当日は先ず上野直昭が開会の挨拶



戦後しばしば来校した藤田嗣治  
(本校玄関前にて仁田三夫氏撮影)

をし、その後式場隆三郎、梅原龍三郎、藤田嗣治、小宮豊隆、小林秀雄、遠山孝、高見順、今日出海らが講演したと記録にある。この夏には美術研究所も夏期美術講座（七月二十五日～三十一日）を開き、帝室博物館も日本美術史講座（七月八日～十三日）を開いて戦後の美術活動の再生を期したが、本校における芸術講座はそれらに一步先んじて開かれたもので、しかも期間も長く、若者の希望によりバラエティーに富んだ講演者が選ばれた。担当の生徒が講演の依頼に行くと、皆喜んで引き受けてくれ、また、文化的催しの殆んど無かった時代であったから、聴衆も多かったという。

### ⑩ 高山夏期研究会

昭和二十一年七月二十日から九月二十日までの間、飛騨高山で夏期研究会が開かれた。宿舎には工芸技術講習所宿舍だった林家があられた。高山行きの計画は、はじめは山岳部が発案して参加者を募ったが、学校側がこれを知り、学校の行事として実施することに